

総合目録データベースの品質管理についての考察 OCLC との比較を通して

明治大学図書館事務部整理課洋書目録係 松本 千草

1. はじめに

明治大学図書館では 1988 年から NACSIS-CAT を使用して目録作成をしている。それにより、従来のようにカード目録を作成していた時代からは比べものにならないほど目録作成業務は軽減化した。そして利用者は、オンラインによる目録システムを検索することにより、常に最新の目録情報を得ることができるようになった。

しかしその一方、従来には無かった数多くの業務や作業が発生したことも確かである。その中の不可欠な業務の一つとして、共同分担入力方式の総合目録データベースを品質管理するためのレコード調整の作業がある。もちろん参加館が十分に目録規則を修得して目録作成の資質の向上をはかり、レコード調整をしなくてもよいように的確な書誌を作成することが、品質管理の理想である。しかし、登録レコード数や参加館数が増加すれば、事後の品質管理であるレコード調整作業も増えてしまうことも現実である。

そもそもデータベースの品質とは何か、と考えるとあまりに壮大なテーマである。しかし、このレポートの中では「品質」の定義を

典拠コントロールがなされていること

重複レコードがなくて検索に支障のないこと

レコードが目録規則や入力規則に沿って正確に作成されていること

の最も基本的な三点に絞りたいと思う。

まず、日常的に業務として行っている品質管理の一環であるレコード調整作業が一体どのくらいあるのか、その現状をまとめてみたい。そして、世界最大の書誌ユーティリティであるアメリカの OCLC ではその品質管理をどのように行っているのかを調査し、NACSIS と比較を行うことにより総合目録データベースの品質管理について改めて考察してみたいと思う。

2. レコード調整作業の現状

それでは現在 NACSIS の品質管理の一つであるレコード調整作業が一体どのくらいあるのか、明治大学図書館の例を見てみたいと思う。資料の(表 1)を参照したい。これは、

明治大学図書館における 1997 年度から 1998 年度 8 月末までの 2 年半の間にレコード調整作業をした書誌レコード件数を月別に統計したものである。月によって件数に多い少ないの差があるのは、その時々による処理している図書の種類（遡及、寄贈本など）の違いによるものである。

1997 年度の総合計が 428 件で月平均が 35.7 件、1998 年度が 533 件で月平均が 44.4 件、1999 年度 8 月末までの月平均が 41.6 件である。これらの数字から、何らかのレコード調整を 1 日に約 2 件近く行っていることが分かる。残念ながら 2 年半分の統計しかないなので必ずしもそうとも言えないが、レコード調整に関わる作業は決して減少しておらず、むしろ傾向としては徐々に増加していると考えられる。

また、表には修正報告のために送信した書誌レコード数が記されているが、実際は修正した書誌レコードの全ての所蔵館に FAX を送信しているため、送信している回数はこの数字より多いことになる。（ただし 6 館以上の所蔵館がある場合は、学術情報センターに依頼している。）

また、レコード調整作業を実際行っていると「分からないので、申し訳ありませんがご自由に修正お願いします。」「ローカルにて修正はできないのですか。」「レコード調整作業は行っておりません。」といった回答を受け取った経験もあり、スムーズにいかないことも少なくない。

このように、現在、レコード調整作業は決して軽視できるような業務量ではないことが分かる。単に送受信をのみ行っているのではなく、現物の取り寄せ、調査、FAX 送信文書の作成も行わなければならないので、短時間でやることのできる単純な業務ではない。利用者サービスを推進するために資料のより迅速な提供が望まれている中で、日常業務をかなり圧迫していることは確かである。今後、目録作成業務に関わる職員数がより削減されていくと予想される現状を考えると、将来はますます日常業務を圧迫する作業になっていくであろう。そして、この傾向は明治大学図書館においてのみではなく、他の NACSIS-CAT 参加館においても同様であると推測される。

3 . NACSIS と OCLC の品質管理の比較考察

それでは、他の目録データベースにおいてはその品質管理をどのように行っているのだろうか。そこで、世界最大の書誌ユーティリティである OCLC のデータベースの品質管理について調査し、それをできる限り NACSIS と比較してみたいと思う。もちろん、NACSIS と OCLC はその沿革、目的などが異なっているため、単純に比較してこのやり方がいい、悪い、と評価することはまったく意味の無いことである。しかし、データベースの違いを踏まえた上での比較は、参考になることもあるのではないかと考えられる。従って単純に比較するのではなく、NACSIS と OCLC の沿革やデータベースの概要、規模等の比較をし、その上で品質管理の比較を行いたいと思う。

3.1 NACSIS と OCLC 比較表

比較項目	NACSIS	OCLC
組織概要	学術情報の収集，整理及び提供並びに学術情報及び学術情報システムに関する総合的な研究及び開発を行うことを目的として，全国的・総合的な学術情報システムの整備を推進する中枢的な機関として設置された大学共同利用機関。	図書館サービス(選書・発注・目録作成・納入・ILL・レファレンス・資料の記録・保管)を向上させることを目的として，書誌データをコンピュータネットワークで維持，運用するために設立された，世界で最初の会員制の非営利社団法人。
発足	1986年	1967年
参加国	主に日本。他にイギリス，タイ，中国の3カ国11機関がCATに参加。 (試行利用機関として)スイス，スウェーデン，ドイツ，ベルギーの4カ国5機関が参加。 (試行利用機関を含めて)8カ国 (1999年9月現在)	67カ国 (1999年9月現在)
参加機関	709館 (1999年8月31日現在)	約3万4千館 (1999年9月現在)
センター人員	134名 (1999年度定員)	スタッフ総数850名強 (1994年6月の資料による)
目録システム	目録システム(NACSIS-CAT)は，日本の研究者の研究活動を支援するため，全国の大学図書館等にどのような学術文献(図書・雑誌)が所蔵されているかが即座に分かる総合目録データベースを構築するシステムである。 この目録システムでは，データベースを効率的に作成するため，標準的な目録データを参考にするとともに，全国の図書館によるオンラインの共同分担入力が行われている。 参加館は書誌を検索して，所蔵を登録し，同時にローカルシステムに書誌と所蔵をダウンロードすることができる。 書誌がヒットしないときは，参加館は新規にレコードを作成して登録することができる。(目録システムコーディングマニュアルに指定されている必須項目を満たしている必要があり，機械的にチェックされる。)	書誌データベースWorldCat(the OCLC Online union catalog)を利用し，目録作成，所蔵の登録をするシステムである。 参加館は端末機からホストコンピュータにアクセスし，WorldCatを検索する。書誌がヒットするとマスターレコードのWorking copyが表示され，それを自由にそれぞれのローカルシステムの仕様にしたがって編集して目録作成を行い，シンボル(所蔵)を登録する。 書誌がヒットしないときには，メンバー館は新規にレコードを作成してOCLCのマスターレコードとして登録することができる。(Bibliographic formats and standards, 2nd ed. に指定されている項目を満たしている必要があり，機械的にチェックされる。) また，OCLCではオンライン，オフラインシステムを通じて図書，雑誌等の図書館資料の目録作成サービスをしており，メンバー館は目録カードや磁気テープ等の提供を受けることができる。
	無料	検索，レコードのダウンロードなどが有料である。新規レコード作成をすると報酬がある。

	NACSIS	OCLC
データベース構成	総合目録データベースの外周に参照ファイルがあるという構造である。	参照ファイルは存在せず，MARC のレコードは USMARC フォーマットに変換後，すべて WorldCat に入る。National MARC は重複レコードとみなさない。
レコード件数	図書 5,003,173 雑誌 223,960 総計 5,227,133 件 (1999年9月17日現在)	42,606,564 件 (1999年10月現在)
所蔵件数	図書 41,298,182 雑誌 3,332,799 総計 44,630,981 件 (1999年9月17日現在)	733,150,817 件 (1999年10月現在)
MARC	USMARC UKMARC GPOMARC DNMARC RECON JPMARC TRCMARC	USMARC NLMMARC UKMARC CANMARC NLAMARC
データ形式	現行 CAT ではメニュー画面方式になっているが，クライアント・サーバ方式の新 CAT では参加館での自由な画面設計が可能である。	USMARC フォーマットに準拠したタグコード形式になっている。
品質管理について		
1. 典拠コントロール	著者名典拠ファイル，統一書名典拠ファイルがあり，リンクをすることで統一書名，著者名典拠コントロールを行っている。	データを登録する場合，LC の Name/Subject Authority をオンラインで検索した上で行うことになっている。 典拠コントロールソフトウェアを使用して機械修正，更新を行っている。
2. 重複レコード	<p>1. センターではシステム（双子メンテナンス SV）により重複レコードの処理を行っている。検索し，確認の上，総合目録データベースから削除している。その手順は</p> <p style="padding-left: 2em;">診断プログラムによる重複レコード（および重複の可能性のあるレコード）の検索 処理対象レコードのリスト打ち出し リスト点検による重複レコードの確認 重複レコードの統合・削除</p> <p>2. 重複レコードを発見した参加館は，センターに通知しなければならない。センターは慎重に調査を行ったうえで当該レコードの処理を行う。</p> <p>3. 参加館が重複レコードの作成館に直接連絡をしてレコード調整することもある。</p>	<p>1. 図書については Duplicate Detection and Resolution (DDR) Program というプログラムを使って機械同定をして重複レコードの検出を行い，統合を行っている。</p> <p>ただし，図書以外の形態の資料（楽譜や機械可読データファイルなど）についてはスタッフが手作業で点検作業を行って重複レコードの統合を行っている。</p> <p>DDR プログラムで図書の重複レコードを検出した後，いくつかの基準にしたがってレコードを比較し，良いレコードが削除されないように保護する処理も行っている。DDR プログラムは重複レコードかどうかの疑問があるときには，双方のレコードをそのまま保持するようになっている。</p> <p>2. メンバー館による重複レコードのセンターへの報告も随時行っている。</p>

<p>3. レコードの修正</p>	<p>現物を所蔵する参加機関にて行うのが基本である。NACSIS センターにてのレコードの修正は基本的に行わない。</p> <p>書誌の作成館が基本的に作成レコードに関して責任を有している。</p> <p>修正の内容・程度によって発見館が修正可のものもあるが、作成館と協議をしなければ書誌を修正できない項目もある。そういう場合は、発見館と作成館とのレコード調整が行われるということになる。</p> <p>発見館と作成館との協議がうまくいかない場合は、原則として既存の書誌レコードを維持するが、調整を希望する場合はセンターに依頼することができる。</p> <p>修正の内容・程度によっては、所蔵館全てに連絡（レコード調整）する必要がある場合もある。 （コーディングマニュアル 21.1「図書書誌レコード修正事項一覧」参照） 連絡すべき館が多数のときはセンターに依頼することができる。</p>	<p>請求記号、件名、内容注記の追加、CIP レコードの形態事項、ミニマル・レベルのレコード（Encoding level: K, M, 2, 5, 7）のアップグレード等の修正は、メンバー館ならどこでもできる。</p> <p>その他の項目やフル・レベル（Encoding level: bl, 1, l, L）のマスターレコードについては、資料の分野によって特に指定された 143 のエンハンスライブラリーのみ修正が可能である。エンハンスライブラリーは毎月約 9,700 件を処理している（1998 年 3 月現在。“Enhance training manual, 1998”より）。</p> <p>エンハンスライブラリー以外の参加機関がデータ中の誤りを発見した場合は OCLC センターに報告をする。OCLC では品質管理部を設け、専任スタッフ 20 名がメンバー館からのレポートをもとにデータ中の誤りを随時修正している。この中には、LC データの修正もあり、LC に連絡をした上で修正を行っている。（『OCLC オンライン図書館システムのご案内』紀伊國屋書店, 1997 より）</p> <p>*“Bibliographic formats and standards”, 2nd ed.参考</p> <p>その他 OCLC では年間 20 万件以上の新規レコードを遡及入力サービスで追加している。このレトロコンスタッフによる作業中に約 6,400 件のレコードを修正した（1997 年報告より）。</p>
-------------------	--	---

（補足解説）

OCLC と NACSIS の目録データベースの品質管理を比較してみてもっとも大きな違いは、NACSIS においては作成後のレコードに対して後々まで作成館の責任が存在するが、OCLC ではそうではないことである。もちろん OCLC においても、新規レコードを作成するときにデータに責任を持って標準の目録作成法に忠実でなければならないことは大前提である。ただ、作成後のレコードについて作成館の責任がずっとついてまわるのではなく、参加館どうしが同レベルの責任を担い、それぞれが品質向上に携わり、ミニマル・レベルのレコードをできるかぎりアップグレードしていこうという考え方である。よって、修正する際に作成館と協議をする義務はないし、修正したときに所蔵館に報告するという

義務もない。(ただし、所蔵している書誌がアップグレードした際に、センターからレポートを受け取るという別の契約もすることができるということである。)もちろん、修正はガイドラインに沿って行うことは当然である。

また、フル・レベルのマスターレコードは特定のエンハンスライブラリー以外は修正できないが、メンバー館が誤りを発見したときには E-mail, FAX, WWW 経由で特定のフォームに記述して送信する方法、レコードのタグ 952 にその旨を記述してオンラインで報告を送信する方法、などの方法によりセンターに報告することができる。その報告を受けたセンターは、必要があれば作成館に問い合わせをして書誌の修正をすることになっている。NACSIS のレコード調整は、現在は基本的に FAX で行われているが、最近は徐々に担当者レベル間で E-mail も使用され始めているという状況である。

NACSIS と OCLC どちらのデータベースも重複レコードを認めないという基本は同一である。資料の(表 2)を見たい。これは、OCLC が上記の DDR プログラムを使用した時期と統合件数をまとめたものである。(表 2)も含めて、以下のデータは全て(株)紀伊國屋書店 OCLC センター調べによるものである。OCLC では、DDR プログラムを 1991 年 6 月 - 1997 年 6 月に 9 回、1998 年 2 月 - 1998 年 3 月に 1 回、1998 年 11 月に 1 回、現在までに計 11 回使用しており、図書においては総合計 1,098,531 件の重複レコードの統合を行った。また、図書以外の形態の資料についてはスタッフが手作業で点検して統合作業を行っていて、1998 年 7 月 - 1999 年 6 月に 12,405 件あったレコードが 10,953 件になったとのことである。差し引き 1,452 件の統合を行ったということになる。

OCLC のデータベースは、上記のような品質管理により一定の高い水準の品質を保っていると報告されている。

3.2 OCLC 参加館の一例

それでは OCLC の品質管理の実際はどのようなのであろうか。1987 年から Online union catalog に参加をして洋書の遡及及び新刊書の目録作成を行っている早稲田大学図書館の方にお話を伺いたいとお願いしたところ、ご多忙中にもかかわらず快いお返事をいただくことができた。

OCLC の書誌で修正が必要なものはどのくらいありますか、という質問をしたところ、AACR2 以前に作成された書誌やドイツのベンダーである Otto Harrassowitz の提供する MARC については省略形などが多く、修正が必要なこともあるということであるが、AACR2 になってから作成されたフル・レベルの書誌レコードについてはほとんど修正の必要はないとのご回答をいただいた。

フル・レベルのレコードで修正を要するものが万が一あった場合はどうされていますか、という質問もした。タグ 952 を使用して OCLC のセンターに何件か報告しているということである。タグに必要事項を記入して送信するというセンターへの連絡方法は、参加館

の負担が少なく、とてもよい方法であると感じた。

メンバー館がオリジナル入力したレコードは、やはりミニマル・レベルが多いということである。早稲田大学図書館でオリジナル入力したミニマル・レベルのレコードを LC がアップグレードの修正をして、なんと USMARC のデータとして取り込んでいるという例もあり、そのレコードも見せていただくことができた。どこかがオリジナル入力したミニマル・レベルのレコードを、メンバー館でアップグレード修正を行っていくという品質管理のシステムは、とてもうまくいっていると感じる。

検索をしていて重複レコードが見つかることも時々はあるとのことである。特に、AACR 1 に従って作成した古いレコードについて多いということである。

また、National MARC については重複を認めているということであるが、

- 1 . USMARC
- 2 . USMARC コピーレコード
- 3 . 参加機関が作成したレコードの中でより良いものもしくは UKMARC

という優先順位で採用しているそうである。(NLMMARC と USMARC が重複することはめったにないらしい。)ただし OCLC では基本的に優先順位は各国の目録作成の習慣を尊重するとしているので、この優先順位は絶対的なものではない。National MARC 間で重複した書誌レコードがあることで検索に支障はないですか、と質問をしたところ、仮に USMARC と UKMARC の 2 件がヒットしたとしても、ブラウザ画面にて DLC (LC データ) と表示されるので特に問題はないとのことである。また、バッチ検索では設定をした数がダウンロードされて、やはりブラウザ画面で区別がつくようになっているので、これも問題はないそうである。

OCLC メンバー館のひとつである早稲田大学図書館にお話を伺った限りでは、OCLC の目録データベースもこれだけ大規模なデータベースである以上、当然修正が必要なレコードや重複レコードの存在があり、それなりに問題を抱えていることが分かった。しかし、データベースの事後の品質管理という点では、センターのリーダーシップ機能がとても強く、また参加機関における負担は少なく、総合してみるととてもうまく行われているように感じた。

4 . NACSIS 総合目録データベースの品質管理についての考察

それでは、OCLC の目録データベースの品質管理を参考にした上で、NACSIS の品質管理について考えてみたいと思う。

将来的な希望も含めて、自分なりに考察してみた。

E-mail の活用

情報源のコピーが必要なときはもちろん FAX での送信が必要であるが、情報源が必要ではないレコード調整も多々ある。参加機関の CATFAX, CATTEL に加えて CATEMAIL を設けてレコード調整の窓口の E-mail アドレスを公開することは、今すぐにできる改善策のひとつである。

図書書誌レコード修正修正事項の見直し

OCLC においては CIP データの形態事項の修正は全てのメンバー館に許されている。NACSIS においても CIP データの形態事項の修正に関しては、原則的に発見館修正可としてもいいのではないかと思う。

エンハンスライブラリーの設置

OCLC の品質管理システムを調査してみて参考にできると思われることに、品質管理にかかわるエンハンスライブラリーの設置ということがある。参加機関の中で複数のエンハンスライブラリーのような機関を設置して、総合目録データベースの品質向上に特に責任もつというシステムは NACSIS で応用できないであろうか。実際今のようなレコード調整のシステムにおいても、それを行う余裕のない参加館が多くあり、修正されるべきデータがそのまま登録され、多くの所蔵がついている現実がある。参加館の代表として特に目録作成知識の修得を行い、その品質管理を学術情報センターと連携して行うエンハンスライブラリーの設置は、将来的な希望も含めて検討の余地のあることだと思う。

学術情報センター経由のレコード調整

NACSIS の品質管理方法のひとつである参加館どうしのレコード調整作業であるが、これは作成館に直接問い合わせをするといういい面もあるが、限界があると思われる。作成館の責任が重いために、レコード作成が負担になってしまっている現実もあると思う。また FAX によるレコード調整の作業にかかる時間も人員もなく、レコード調整作業が必要であるときにも目をつぶってしまうこともあると想定されるし、実際いくつかの参加館に聞いてみたところ、「ある」というお返事をいただいた。今後、レコード数も参加館数も増加し、しかもそれぞれの参加機関は定員削減されていくと考えられる。そういう状況から考えると、現在のレコード調整の方法は将来的にはより困難になると推測される。

やはり解決策としては、それをまとめる学術情報センターの機能を強くしていかざるを得ないと思う。将来的には学術情報センター経由でのレコード調整が理想である。センターに問い合わせ、またはレコードの修正を報告する。そして、それを受けたセンターがレコードを修正、または作成館に問い合わせをする、という方法が理想である。セ

ンターでレコード調整をまとめた場合、ホームページ上に連絡用のフォームを定めて、参加館はそれを使用してインターネット経由でセンターに報告するという方法が有効になる。しかし、この学術情報センター経由のレコード調整についてはセンターの人員の問題もあり、現状ではとてもできることではない。学術情報センターの組織の再構築という大きな問題も含めて考えていかなければならないと思う。

5. おわりに 何のための目録か

奥村佳郎氏著「OCLC 国際会議参加報告」(「ふみくら」早稲田大学図書館報 1997, no.58, p.14-15)の中にアメリカの図書館間協力についてオハイオ州内の公立・私立の大学や公共図書館の計 52 機関が OhioLINK という同じシステムを導入し、ILL から有料データベースの共有まで多彩なサービスを行っている例が詳述されている。それによると、オハイオ州立大学(OSU)は OhioLINK の主メンバー館であり、ILL が急増しているそうである。「(以下引用)他館への貸出数増による弊害がないかと尋ねたところ、他館から借用できるメリットの大きさの前には問題にならないという答が返ってきた。」という一文に改めてはっとさせられた。奥村氏の論じているように、NACSIS だけで満足するのではなく、地域コミュニティとの絆、他大学図書館との連携など複数のチャンネルを使って機関を超えた協力をすることが大切であると感じる。

NACSIS-CAT も将来的には Z39.50 プロトコルをベースに OCLC などの他の書誌ユーティリティと相互参照できるようにする計画があることを聞いた。これは、世界中の利用者サービスにつながる素晴らしい計画であると思う。

自分なりにこのレポート作成を通して改めて再認識したことがある。図書館を運営するためのひとつの業務として日々目録作成を行い、結果として NACSIS の総合目録データベースを構築しているが、日常業務にとらわれすぎて最終目的を忘れがちであることである。総合目録データベースの最終目的である「図書館利用者に対する情報提供の良質なサービス」を常に忘れてはならないし、データベースの品質管理もその最終目的に沿って行われなければならない。ややもするとあまりに細部にこだわりすぎて「目録のための目録」に陥りがちであるが、それではいけない。利用者への迅速かつ適切な情報サービスという最終目的を常に念頭において、利用者は一体何を求めているか、何を望んでいるか、を考えつつ目録を作成しなければならないことを再認識した。そしてそれが結果的には、総合目録データベースの品質向上につながるのである。

最後に、このレポートを作成するにあたり、ご多忙中にもかかわらず快くお話を聞かせていただきました早稲田大学図書館の吉田伸一整理課長、(株)紀伊國屋書店システム営業本部データベース営業部プロセッシングセンター(早稲田分室)の佐藤麻美係長、再三の質問にも丁寧にお答えいただきました(株)紀伊國屋書店 OCLC センターの土田薫子氏、

(株)紀伊國屋書店データベース営業部プロセッシングセンターの小粥洋美課長代理，様々な助言をしてくださいました明治大学図書館の飯澤文夫整理課長，そして長期間にわたりたいへんお世話になりました学術情報センターの皆様，研修員の皆様に心から感謝したいと思います。

[参考文献]

- NACSIS Homepage (<http://www.NACSIS.ac.jp/NACSIS.index.html>)
- 総合目録データベース現況 (<http://www.cat.op.NACSIS.ac.jp/INFO/ncdb.html>)
- 目録所在情報サービス接続機関一覧
(<http://www.cat.op.NACSIS.ac.jp/INFO/sanka-kikan.html>)
- NACSIS 沿革 (<http://www.NACSIS.ac.jp/brief/history-j.html>)
- 『目録情報の基準』 第3版 (学術情報センター, 1997)
- 『目録システムコーディングマニュアル』 (学術情報センター)
- 『目録システム利用マニュアル 登録編』 第4版 (学術情報センター, 1998)
- OCLC's strategic plan to the next stage of the electronic library. (Kinokuniya Company, OCLC Sect. Database Marketing Dept.)
- 『OCLC オンライン図書館システムのご案内』 (紀伊國屋書店, [1997])
- 紀伊國屋書店データベース営業部 OCLC 課 立川知子 『OCLC と大学図書館』 (私立大学図書館協会平成9年度第1回研修会パネルディスカッション資料)
- OCLC (Online Computer Library Center)
(http://www.kinokuniya.co.jp/03f/5_6_1.htm)
- OCLC データ (http://www.kinokuniya.co.jp/03f/5_6_2.htm)
- OCLC 目録作成サービス (http://www.kinokuniya.co.jp/03f/5_6_3.htm)
- 谷口祥一 『OCLC 研究部に滞在して』 (図書館情報大学附属図書館報, 1995, v.11, no. 1)
(<http://www.dl.ulis.ac.jp/LibComm/Vol11No1/taniguchi.html>)
- 奥村佳郎 『OCLC 国際会議参加報告 : 付 . オハイオ州立大学図書館, UCバークレー校図書館訪』 (ふみくら : 早稲田大学図書館報, 1997, no. 58)
(<http://www.wul.waseda.ac.jp/PUBS/fumi/58/58-14.html>)
- 日本で初めて早稲田大学図書館が OCLC のホームページで紹介される !
(<http://www.wul.waseda.ac.jp/event/OCLCfeatured.html>)
- Becky Wright. Duplicate detection and resolution program supports quality control of WorldCat. (OCLC Newsletter, Membership news, no. 230, [1997])
(<http://www.OCLC.org/OCLC/new/n230/memnews.htm>)
- Bibliographic Formats and Standards, 2nd ed. (OCLC, updated April 23, 1999)
(<http://www.OCLC.org/OCLC/bib/chap5.htm>)
- 『学術情報データベース整備の推進方策について (中間まとめ)』 (学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会, 1997年6月27日)
(<http://www.monbu.go.jp/singi/gaksin/00000091/>)
- 『学術資料の迅速提供計画 WG 報告書資料』 (明治大学, 1997)

[資料]

(表1) 明治大学図書館レコード調整件数

数字はレコード件数

この統計は NC オンラインニュースレター掲載のレコード調整数は含まれていない

1997 年度

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均
送信	問合せ	5	7	19	18	4	1	3	5	15	5	12	8	102	8.5
	報告	3	4	5	4	2	5	3	5	3	6	4	6	50	4.2
受信	問合せ	9	9	7	21	11	12	13	12	12	14	7	15	142	11.8
	報告	3	16	12	9	5	14	15	17	8	6	10	19	134	11.2
月合計		20	36	43	52	22	32	34	39	38	31	33	48	428	35.7

1998 年度

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均
送信	問合せ	7	17	38	21	10	14	23	22	12	8	20	13	205	17.1
	報告	0	7	4	7	0	2	3	3	4	2	1	6	39	3.3
受信	問合せ	9	23	12	20	5	8	12	10	9	8	10	10	136	11.3
	報告	5	15	19	14	13	13	23	10	7	6	11	17	153	12.8
月合計		21	62	73	62	28	37	61	45	32	24	42	46	533	44.4

1999 年度

		4月	5月	6月	7月	8月	合計	月平均
送信	問合せ	21	15	19	50	13	118	23.6
	報告	8	1	4	3	1	17	3.4
受信	問合せ	10	6	9	13	9	47	9.4
	報告	6	3	9	3	5	26	5.2
月合計		45	25	41	69	28	208	41.6

(表2) OCLC

DDR プログラムにより統合を行った重複レコード件(図書)

1991年6月 - 1997年6月	1,000,680
1998年2月 - 1998年3月	50,777
1998年11月	47,074
総合計	1,098,531

1999年9月 紀伊國屋書店 OCLC センター調べ